



2026年度 須磨学園中学校入学試験

国語

第1回

(注意)

解答用紙は、この問題冊子の中央にはさんであります。まず、解答用紙を取り出して、受験番号シールを貼り、受験番号と名前を記入しなさい。

1. すべての問題を解答しなさい。
2. 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
3. 解答は、1行の枠内に2行以上書いてはいけません。また、字数制限のある問題については、記号や句読点も1字と数えることとします。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

須磨学園中学校

―― 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

【本文】

A 「利便性の高いシステムは、わたしたちを本当に幸せなものとしているのか」、こうしたギロ^aンがいま各所で同時多発的になされています。

利便性、効率性、経済的合理性など、これらを懸命に追求してきたはずなのに、なんだか違う……。こんな便利なモノだけに囲まれて、本当に幸せなのでしょうか。たしかに便利なのですが、そこで自分が生き生きとした感じがしないのです。

かつてイヴァン・イリイチは、『コンヴィヴィアリティのための道具』（ちくま学芸文庫、一〇一五年）の中で、二つの分水嶺^bの存在を指摘^cしました。わたしたちはさまざまな道具を手に入れることで自らの能力をカクチヨウさせることができた（＝第一の分水嶺）わけですが、シダイに利便性の高い道具やシステムに頼るなかで、いつの間にか隸属^dしていた（＝第二の分水嶺）というのです。

たとえば、自動運転システムはどうでしょう。たしかに便利なものであり、高齢者や障がいのある方々にとつて福音^eとなるものです。交通事故のティゲン^fや渋滞^gの緩和につながることも期待されています。ところが、「勝手に運転してくれるクルマって、いいかも……」などと油断していると、「なにも手が出せず、ただやつてもらうだけ」の状況になってしまこともあります。少し冷静に考えるなら、ただの「荷物の一つ」として運ばれるような気分にもなるのです。

あるいは、「ごはんを食べさせてくれるロボットがあつたらどうか」と、そうした研究開発も進められています。たとえば手や腕に痛みやしびれがあつたりして、お箸やスプーンなどが持ちにくいやつなど不自由がある人には、大切な支援機器となることでしょう。ただ、すべてをロボットに委ねてしまうのも考え方です。なにも手を出すことなく、ただ口を開けて待っているだけ……。どこかロボットの采配^{さいはい}で生きながらえているような気持ちになってしまわないでしょうか。いったい、どこでボタンの掛け違えをしてしまったのでしょうか。

至れり尽くせり……、相手のためを思い、すべてのことをやつてあげる。この「相手のために！」と尽くしすぎる行動は、むしろ相手の主体性や「人らしさ」を奪^{うば}ってしまう側面もあるのです。そうしたこともあり、モノやシステムとのかかわりでも、これまでの「利便性」ⁱ「辺倒^j」がチカン^kを見直してみようというわけです。

その一つのヒントは、「コンヴィヴィアリティ（conviviality）」という言葉にあります。もともと「和氣あいあいと食事を楽

しむような雰囲気^{ふんいき}」を指す言葉で、「ともに（con-）・生き生きと

した（vivial）」の意から、「自立共生的なかかわり」、「共喫^{きき}的なかかわり」と訳されることもあります。先に「注文をまちがえる料理店」のところで、ノベたように、「お互^{たが}いの立場を越えて助けあい、みんなが一つになつて、その場をモリ上げている」。そんな雰囲気かと思われます。そうした中でお互いは、「自らの能力が十分に生かされ、そこで生き生きした幸せな状態」を指す、ウェルビーイング（well-being）をアップさせているようなのです。先のハサミの場合は、どうでしようか。わたしたちの柔らかな手の中について、ハサミに新たな機能や役割が立ち現れます。とともに、それを巧みに使いこなす者として、使い手であるわたしたちも新たにカチづけられます。ハサミが潜在^{せんざい}していた能力を引き出してくれているのです。

あるいは、初めてクルマのハンドルを握り、アクセルを踏みこんだときに、とてもドキドキ、ワクワクしました。すぐに自在に操れるようになり、ロングドライブの後には、ちょっととした達成感や有能感も覚えたことでしょう。クルマはわたしたちの身体の一部となつて、その機能をカクチヨウしてくれます。これはとてもも幸せなことであり、また街や道路と一体となつた感覚はとても心地よいものでした。

ハサミとのかかわり、そしてクルマの運転。先ほどのイリイチの指摘に従えば、これらは「コンヴィヴィアリティのための道具」の一つであり、わたしたちのウェルビーイングをアップさせるのに、一役買つていたわけです。

I （＝自律性）、「□ II ……」という有能感や達成感、そして III や街と一緒になつた感覚（＝関係性）など、わたしたちのウェルビーイングをアップさせているようなのです。

岡田美智男^{おかだみちお}『弱いロボット』から考える』

注1 イヴァン・イリイチ：オーストリアの哲学者。

注2 福音：よろこばしいしらせ。

注3 「注文をまちがえる料理店」：認知症の人が注文を聞くシステムのレストラン。本書の前項でコンヴィヴィアルなかかわりの例としてあげられている。

注4 ハサミ：本書の前項で、「弱さ」を持つ道具の例としてあげられている。

注5 ライアンとデシ・リチャード・ライアンとエドワード・デ

シ。どちらもアメリカの心理学者。

一の設問

問一 「利便性の高いシステムは、わたしたちを本当に幸せなものとしているのか」（——線部A）とあります。そのようなギロンが起きるのはなぜですか。その説明として最も適当なものを、次の中のものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムのために、利用者はシステムに従うだけの存在になり、自分の意志で考えて行動する機会を失ってしまう可能性があるから。
- 2 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムは便利ではあるが、まだ十分に自らの能力をカクチヨウできているとはいえない、ハサミのような原始的な道具に頼らざるを得ないから。
- 3 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムは利用者から生き生きとした実感を奪い、利用者を精神的にも、肉体的にも衰えさせてしまう可能性を持つているから。

4 利用者の使いやすさを志向しすぎたシステムに満足するところ、それよりも効率性や経済的合理性を高められるシステムがつくりだされる余地をなくしてしまうことになるから。

- 問四 本文中の空欄 I、II、III にあてはまる語句として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。なお、同じ番号を複数回使つてはいけません。
- 1 クルマとの一体感
 - 2 ドキドキ、ワクワクすること
 - 3 誰よりも早く走れる
 - 4 クルマを自在に操れること
 - 5 シダにうまくなった
 - 6 空も飛べるはずだという感覚
 - 7 身体機能がカクチヨウされた幸福
 - 8 不自由がなくなつた

これまで培つた経験や勘も生かせず、システムの独りよがりな行動に一方的に付きあうだけ。

- 問五 「ウェルビーニングをアップさせている」（——線部C）とありますが、次の1～4が本文に書かれる「ウェルビーニングをアップ」させる例として適当であればY、適当でなければNを記しなさい。
- 1 少し遠出をするのに自転車を使う。
 - 2 自由研究の宿題をA-Iの指示のままに行う。
 - 3 ミシンを使って、洋服を縫う。
 - 4 ベルトコンベアを使い、全自动で製品を作る。

設問は、裏面に続きます。

問三 「その機能」（——線部B）とありますが、それはどのような機能ですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 達成感や有能感を覚える機能
- 2 別の場所に移動する機能
- 3 交通事故や渋滞を少なくする機能
- 4 旅に出る喜びを感じる機能

問六 この文章で筆者は、どのように生きることで人間はより幸

せになれると考えていますか。一〇〇字以上一二〇字以内で説明しなさい。ただし、本文中でアルファベットが付記されている言葉をそのまま使ってはいけません（句読点も一字と数えます。なお、採点は、どういう書かれ方をしているかについても見ます）。

下書き用（※これは解答用紙ではありません）

問八 次の「資料」を読み、後の設問に答えなさい。

【資料】

便利なのか？ 不便なのか？ その境界線が溶けていく中で筆者が注目したいのは、「人は本当は何を欲しがっているのか？」「心に残る体験はどうすればつくることができるか？」という問い合わせでした。

この答えに迫る上で今回紹介したいのが、「便利が無条件に好ましいわけではなく、意図する／せざるに閑わらず「不便な状況がある、あるいは好んで不便を取り入れることによって、かえって喜びが生まれたり、共感できるタネが生まれる」とい

う真理。（中略）
「不^ふ便^{べん}益^{えき}」という言葉。もしかすると、書籍やテレビ番組他で耳にしたことがあるかもしれません。

具体的にいうと、以下のようなことを指します。

・造花は水をやる必要がなくて楽ちんだが、世話をしないと枯れてしまう生花に愛を注ぐ方が好きだ

・遠足のおやつは「三〇〇円まで」（なぜかいつの時代も）と制限されるからこそ、お菓子コーナーでは気合が入るのであり、その楽しさは今も覚えている

・YouTubeでもアーティストのライブは見られるのに、わざわざ雨ガッパで山奥の夏フェス会場へ足を運び、どろんこずぶ濡れになつて見たあの日のステージが忘れられない

いかがでしょうか（ご自身の体験を、ぜひ思い起こしてみてください）。

これらの例に共通していることは、「手間ひま（面倒）や遠回り、苦労、負荷がそこに存在することで、（存在しない場合に比べて）体験そのものが味わい深くなり、印象に残りやすい」ということ。

「ああ～そういうのあるよね、前から」と誰もが、なんとなく共感できるのではないでしようか。（中略）

過剰な便利さに対し、人々が心地よくないと感じたり、どこない不安を抱くという事実は、いわゆる「スマホ疲れ」「SNS疲れ」「デジタルデトックス」といった、二〇〇〇年代初頭から流行してきた言葉を振り返つても分かることです。このことについて、^注川上先生の書籍では、「人間は目の前でそのしくみが理解できる道理」「物理」に根ざした安心を感じるようにできている（目をみて話を聞き、うなずきながらエンピツでメモをとるビジネスパーソンの方が目も合わせずにスマホとタブレットをスワイプしまくる「デキる風ビジネスパーソン」よりも信頼される」といったメカニズムが紹介されています。なるほど「物理」かと、いたく腹に落ちました。

（電通報 二〇二一年二月二十四日）

設問は、次の用紙に続きます。

注 川上先生：川上浩司。「不^ふ便^{べん}益^{えき}」の提唱者。

問 「本文」と「資料」を読み、その内容として適当なものを、後の選択肢からすべて選び、番号で答えなさい。

1 「資料」にある「不利益」を人に感じさせるものとしては、「本文」の「ハサミ」や従来の「クルマ」のよう、全てを機械に委ねるのではなく、人が人の手によって操作するものが該当する。

2 「資料」も「本文」も人間が今以上に利便性を求めて文明化することについては否定的であり、人間が人間らしく生きるために「デジタルデトックス」や「スマホ離れ」をする必要があるとする。

3 「資料」によると、人間は「造花」や「You Tube」の方が、「自動運転システム」や「ごはんを食べさせてくれるロボット」よりも物理的に身近であるため、心に残りやすい。

4 「資料」によると、「注文を間違える料理店」のように、意識的に不便な状況をつくりだしたものの方が、「ハサミ」などのような、自然に不便な状況を持つものよりも心に残りやすい。

5 「資料」も「本文」も、不便な状況や面倒くささがあることを肯定的に捉えるが、「本文」ではそれが人間らしい生活のために必要だとするのに対し、「資料」では心に残る体験のために必要だとしている。

二

次の文章は、早見和真『アルプス席の母』の一節です。

菜々子には、全国高等学校野球選手権大会（甲子園）の出場

を目指す、高校三年生の息子・航太郎がいる。航太郎は肘の怪我による挫折をへて、控え選手として夏の地方大会に出場

する。以下の文章は、普段は寮で生活する航太郎が、背番号をもらえた報告のために菜々子のもとに帰つて来た場面です。これを読んで、後の設問に答えなさい。

その一週間後の日曜日、航太郎が家に戻つてきた。夜になると言つていたのに、連日続く豪雨のせいで練習が早く終わつたらしく、夕方には帰つてきた。

「ホンマ。少しでも追い込みたいこの夕□□□□グで雨ばっかりなのはキツいで。他の学校も条件は一緒やろうけど、いまはもつと練習したいのに」

独り言のように不満を漏らしながら、航太郎はまっすぐ仏壇に向かつた。もうその身体の厚さに面食らうことはない。見慣れたといふこともあるだろうけれど、一番大きかった頃に比べると少し肉が落ちた気がする。

A 「ちゃんとご飯食べてるの？」

「うん。食べとるで。ずっとおいしくないと思つてた寮のメシやけど、あと何回も食べられないと思うと名残惜しい」

「そやな」

航太郎は仏壇の前に正座すると、きちんとロウソクから線香に火をつけ、その炎を手で消してから、おりんを鳴らした。

ずいぶん長い時間、航太郎は手を合わせていた。遺影の健夫はいつもと同じ笑みを浮かべている。亡き父に何を語りかけているのだろう。もちろんその声は聞こえないが、きっといい報告をしているに違ひない。

ようやく合掌を解くと、航太郎はどこか照れくさそうに菜々子の待つダイニングテーブルにやつて來た。

「何か飲む？」

「アイスコーヒーある？」

b 「□□前に」

そんなイヤミを言いながらも、菜々子は言われたまま冷蔵庫のコーヒーをグラスに注いで、テーブルに置いた。

航太郎はそれを一息に飲み干した。

「早くない？ もう一杯？」

「ううん、大丈夫。自分でやる」

「いいよ。そんなのべつに」

「いや、それよりさ、お母さん——」

そう切りだし、航太郎が次の言葉を発するまでに、たしかにわ

ずかな間があった。

B 「俺の野球はここまでやから」

「どういう意味？ 高校野球がってこと？」

「ちやうわ。野球そのものが」

「なんで？ 大学でも続けるんじゃなかつたの？」

最後にそれを聞いたのはいつだつたろうか。そんなに前のことじゃない。少なくとも高校に入つてからのことだ。この先も野球は続けるものと頭から信じていた。

航太郎はうつすらと目を細めた。

「もうええやろ。ここまでやつたら充分や。中途半端に続けるのは性に合わん。高校野球は最後までやり切つたんやし、お父さんも認めてくれるんちやう？」

そう口にして、航太郎は健夫の写真に目を向ける。ヘラヘラと笑つてはいるけれど、意志を感じさせる声だつた。ああ、そうか。そのことを先に健夫に報告したのか。そんなことをボンヤリと思う。

べつに辞めたいなら辞めればいい。それを止めようとは思わない。しかし、だとすれば聞いておかなければならないことがある。「でも、だつたらどうするのよ。あんたから野球を取つたら何もなくなるじやない」

航太郎は呆れたように肩をすくめた。

「おかんがそんなこと言うのはあかんやろ。でも、まあ大丈夫や。おかんを楽させるために就職するとかは言わんから。どうい形になるかは知らんけど、大学には行こうと思うとる。俺、高校野球の監督になりたいんや。自分みたいに野球でいい思いも、しんどい思いもした人間が指導者になるのはええと思うんよな。エリートのまま監督になつた人間は最悪や。だから、そやな。野球を辞めるつていうか、本格的な野球をつていう感じか。ひとまず封印や」

C 「それ、佐伯さんのこと言つてるの？」

何か言葉を発さなければ、航太郎の勢いに飲み込まれてしまいそうだった。航太郎は茶化すように口をすぼめる。

「たしかにあの人もその一人かな」

「でも、佐伯さん変わつたよ。少なくとも私は最近の監督さん接しやすい」

「それは同感」

「それでも人のやり方を否定する？」

「それは、するかな」

E 「どうして？」

「そういうものだと思うから」

航太郎はきっぱりと言い切った。意味がわからず、小首をかしげた菜々子の目をじっと見つめて、航太郎はさらに思つてもみなことを口にした。

「俺、もしいまお父さんが生きていたとしても、わりと反発してたと思うんだよね。好きとか、嫌いとかいうことじゃなく、なんというか、父親つて息子にとつてそういうものだつていう気がする。連れん^{3れん}とか大成たいせいとかの親父さんとのかかわり方を見ててそう思つたことがある。少しだけうらやましかつた。だけど、俺には俺でそういう仮想敵みたいな人はいるよなつて、あるとき思つた」

「それが佐伯監督？」

「うん。あなたは俺の父親代わりですみたいなことを言つつもりは全然ないし、気持ち悪いから絶対に本人には伝えないけど。まあ、感謝はしてる。だからこそ、あの人のやり方を否定しないでいいって思つてる」

ねえ、航太郎。あん

「そうか。じゃあ、いよいよ甲子園行かなきやね」

十九

「なんやねん」

「あんた、さつきから『おかん』って言いすぎ。私ホントにそれ
イヤなの。今度言つたらマジで縁切るから」

航太郎はキヨトンとした表情を浮かべ、すぐに「なんだよ、どうさくさに紛れてイケると思ったのに。つてか、最近お母さんのお父さんおとうさんが止まらないって陽人ひばりのおかんから聞いたんやけどな。ちゃうの？」などとの□□つた。

菜々子は笑うのをグッと堪えて、窓の方に目を向けた。あいかわらず雨が降り続^らき、雷鳴^{らいめい}まで轟^{とどろ}いている。

F をくぐり抜けたら、高校野球最後の季
「がんばりなさい。応援して^{おうえん}るから」

「そんな母の言葉の意味を、息子ははき違えたらしい。
『そんな大層なことでもないやろう。たかが『おかん』って呼び
方くらい。大げさやな』

注1 健夫：航太郎の亡父。航太郎が私立の強豪野球部を意識する一つのきっかけとなつた。

注2 佐伯さん：航太郎の所属する野球部の監督。
注3 連とか大成：どちらも、航太郎の野球部の仲間。
注4 陽人：航太郎の野球部の仲間。

二の設問

問一 ~~~~~線部a～cの空欄に入る文字として最も適当なものを、aはカタカナ、bは漢字、cはひらがなで答えなさい。

なお、空欄一つにつき、一文字が入るものとします。

- a タ□□□グ
b 一□前
c の□□つた

問二 「ちゃんとご飯食べてるの？」（――線部A）とあります

が、ここで菜々子はどのような気持ちでいるのですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 おいしくない寮のごはんでは十分な栄養が摂れないだろうから、自分の手料理を食べさせたい気持ち。

- 2 連日の豪雨で練習ができないストレスから食事が摂れない息子を、あれに思う気持ち。

- 3 野球をやめようと思つてゐる息子に対し、間接的な話題から励まそうとする気持ち。

- 4 一時期に比べて痩せてしまったように見える息子が、健康的な生活ができているのかを心配する気持ち。

問三 「俺の野球はここまでやから」（――線部B）とあります

が、この言葉には航太郎のどのような思いがこめられていますか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 甲子園出場やプロを目指して練習する野球は高校でやめ、挫折した経験を指導に活かせる野球の監督になることを目指し、大学に進学したいという思い。

- 2 部活でレギュラーを取るほどの才能は備わっておらず、それを補うためにどれほどの努力をしてもどうにもならなかつたことを悔しく感じる思い。

- 3 プロ野球選手になつてほしいと思っていた父親や佐伯監督に反発するため、プロを目指しての本格的な野球は高校でやめようという思い。

- 4 女手一つで育ててくれた母親を楽にするために、プロ野球選手を目指すのをやめて大学に進学し、安定した職業に就こうという思い。

設問は、裏面に続きます。

問四 「うつすらと目を細めた」（――線部C）とあります

このときの航太郎はどのような気持ちでいるのですか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 高校での部活動を思い出し、道半ばで野球を辞めることとなり、父の目の前で活躍する姿を見せられなかつた自分を不甲斐なく思つてゐる。

- 2 亡くなつた父親の、高校野球で活躍し、甲子園に出場してほしいという期待に応えられたことを確信し、誇らしく思つてゐる。

- 3 野球をやめる決心をしたが、自分の進路がぼんやりとしていることを、父が生きていればどう思つてゐるだろうかとうことに不安を抱いてゐる。

- 4 希望学園での三年間の部活動に全力を尽くしたと自負しており、そのことを亡くなつた父親も喜んでくれるだらうと思つてゐる。

問五 次の文章は、「そのことを先に健夫に報告したのか」（一）

一線部D) という記述について説明したものである。これを読んで、後の問い合わせに答えなさい。

「そのことを先に健夫に報告したのか」の「か」は、「気付き」を表す言葉であり、ここでは、航太郎が健夫に報告していたのは、（　Ⅰ　）ということではないのだ、と菜々子が気付いたことを意味している。寮から帰つて来た航太郎が、「まつすぐ仏壇に向か」い、「仏壇の前に正座すると、きちんと」した作法で、「ずいぶん長い時間」「手を合わせていた」という表現と、――線部Dから、航太郎の（　Ⅱ　）という気持

i 空欄（I）に入る言葉として最も適当なものを、次の
中から一つ選び、番号で答えなさい。

ii 空欄（II）にあてはまる内容を、六〇字以内で答えな
さい。

- 1 甲子園への出場が決まった
- 2 野球を辞める決心をした
- 3 卒業と同時に退寮が決まった
- 4 最後の大会の背番号がもらえた

60		40		20

下書き用（※これは解答用紙ではありません）

設問は、次の用紙に続きます。

問六 「それは、するかな」（——線部E）とあります。が、それ

はどういうことですか。その説明として最も適当なものを、
次のなかから一つ選び、番号で答えなさい。

1 航太郎から見た佐伯監督は、エリートのまま監督になつた人間の代表的な存在で、自分が理想とする監督像とはかけ離れた人間性を持つてゐるから、最近の監督の接しやすさや考え方にはかわらず、監督のやり方を否定するということ。

「そのことを先に健夫に報告したのか」の「か」は、「気付き」を表す言葉であり、ここでは、航太郎が健夫に報告していたのは、（　　I　　）ということではないのだ、と菜々子が気付いたことを意味している。寮から帰つて来た航太郎が、「まつ

1 航太郎から見た佐伯監督は、エリートのまま監督になつた人間の代表的な存在で、自分が理想とする監督像とはかけ離れた人間性を持つてゐるから、最近の監督の接しやすさや考え方にはかわらず、監督のやり方を否定するということ。

けれども、監督のやり方を否定するということ。

3 父親を亡くした航太郎にとつて佐伯監督は、父親のような側面を持つ存在であるから、友人がそれぞれの父親に反発しきえようとするように、最近の監督の指導方針や指導内容にかかわらず、監督のやり方を否定すること。

4 航太郎は佐伯監督に感謝はしているが、時に父親のような顔をする監督の態度には不快な感情を抱いているため、最近の監督が航太郎の母親と打ち解けたことにかかわらず、監督のやり方を否定すること。

問七 「がんばりなさい。応援しててるから」（――線部F）とあ

りますが、このときの菜々子の気持ちの説明として最も適当なものを、次のなかから一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 航太郎が、自分のことを「お母さん」と呼ぶのに恥ずかしさを覚える年齢になつたのだと微笑ましく感じ、怒つたふりをしながら、航太郎が「おかん」と呼ぶのを茶化そうと思う気持ち。

- 2 航太郎が、父親がない中でも立派に成長し、自分なりに進路を考えていることに安心し、その進路の実現と、苦労しながらも希望学園野球部での活動を前向きに全うしての甲子園出場を後押ししたいと思う気持ち。

- 3 航太郎が、希望学園での部活の集大成として、甲子園に出場するだけでなく、レギュラーを獲得してほしいと思い、時には理不尽だと感じるほどに厳しい監督のもとの指導を乗り越えられるように祈る気持ち。

- 4 航太郎の自分に対する言葉遣いを正すことで人としての成長を促し、より一層真剣に野球部の活動ができるような精神性を鍛え、なんとしても甲子園に出場させてあげたいと思う気持ち。

問八 本文の表現や内容の説明として最も適当なものを、次のなかから一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 本文は菜々子の「一人称で語られているため、菜々子の心情はすべて明確に描かれている。
- 2 菜々子にも航太郎にも大阪弁を使わせることで、家庭内のリラックスした雰囲気が描かれている。
- 3 航太郎の佐伯監督に対する、「あの人」という呼び方は、監督に対する反発心が表れている。
- 4 「イヤミ」、「縁切るから」などの言葉に、思春期の航太郎を扱いかねる菜々子の心情が表れている。
- 5 「いや、それよりさ、お母さん」や「たしかにあの人もその一人かな」など、航太郎が真剣に本心を話すときには標準語が使われている。

↓ここにシールを貼ってください↓

受験番号

前名

2026年度 須磨学園中学校 第1回入学試験解答用紙 国語

(※の欄には、何も記入してはいけません)

